

「新臨床外科学」第3版

日本赤十字社医療センター院長	森岡 恭彦	監修
東京大学医学部教授・腫瘍外科	武藤 徹一郎	編集
北海道大学医学部教授	加藤 紘之	
東京大学医学部助教授	齋藤 英昭	
東海大学医学部教授・外科	田島 知郎	
金沢大学医学部教授・がん研究所	磨伊 正義	
東京大学医学部教授・外科	幕内 雅敏	
三井記念病院部長	鰐淵 康彦	
東京大学医学部助教授・腫瘍外科	名川 弘一	編集協力

横浜市立大学医学部第2外科

嶋 田 紘

医師の国家試験が2001年から大幅に見直され、これまでの知識偏重型から患者とのコミュニケーション能力や基本的な臨床能力を重視したものになるという。実地に即した幅広い医療を提供できる医師を育成するため、臨床研修の必修化とともに将来的には実技試験も行う予定であると厚生省は発表している。

この方針を実施するためには基礎系の先生の協力の下に、学部における臨床教育の早期開始やスタッフの充実とともに、内容のレベルアップを考えなければならない。医学生に対する教科書は多く出版されているが、どれも従来の知識偏重の域を出ない。実習中心の教育を充実させるための適切な教科書がないため、これまでは専門家を養成する専門書によって代用してきたのが現状である。

「新臨床外科学」は、本年3月15日に第3版が刊行された。今回の版では、執筆者も第一線の現場で活躍されている人を中心に選ばれ、従来

の外科総論という形は廃止し、周術期患者管理、救命救急処置、基本手術手技として記載され、更に一般外科医が日常の臨床で遭遇する他科の疾患や他科との協力下で行う医療まで言及している。文字どおり具体的な問題から原則へと導き出すよう工夫されている。

それぞれの疾患の項目では、まず“病態理解のキーノート”に始まり“診断へのアプローチ”，そして“治療のストラテジー”が記載されている。病態診断法、治療の選択については図や表を多く取り入れ、できるだけ読者の理解が得られるように工夫されている。また治療成績も最近の結果が記載されているし、問題点のあるところは“カレントトピックス”として別に解説している。

“肝移植”の項目を見ると、なぜ普及するに至ったかを歴史的背景を交えながら病態理解のキーノートに述べ、次に適応、そして手術手技が述べられている。手術手技は全肝移植のほかには部分肝移植や、最近行われ

出した補助肝移植にまで言及している。“カレントトピックス”には、現在最も注目されている免疫学的寛容について microchimerism にも言及して興味を引くように要点が述べられている。そして最後には更に詳しく知りたい人のために文献が記載されている。

全編を読破したわけではないが、本書は実地に役立つ臨床医の基本的な知識や技能に始まり、それから導き出される理論を追求するよう配慮されている。いわゆる hospital-based medicine、または patient-based medicine を本書は考えて企画されたもので、厚生省の実施に即した医師を育成する方針とも合致するように思われる。現在の postgraduate、これからの医学生の臨床教育のための座右の書、更に日常の整理に役立つものと思われる。

● B5 頁 900 写真 235 カラー
写真 57 色図 493 表 359 1999
定価(本体 18,000 円+税) 円 600

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)